

第四十四回中央教化研究会議 記念講演

宮澤賢治の銀河世界

宮澤和樹

今回の中央教研記念講演は、株式会社林風舎代表取締役でございます宮澤和樹様にお願いを致しました。宮澤賢治の実弟でございます宮澤清六さんという方のお孫さんに当たられる方でございます。昨日、夕食を一緒にさせていただいた折りに、「宮澤賢治の人格を守っていきたいんだ」というお話をされました。賢治は、没後五十年を過ぎております。賢治という人を守らなければいけないということで、賢治の精神や作品を正しく後世に伝えていく為の活動を、様々な形で行っているという事でございます。皆様のお手元に、『宮澤賢治 魂の言葉』という、本の要文集を差し上げているところがございますが、こちらの監修をされているという事でございます。

では、宮澤様、よろしくお願いをいたします。

皆様今日は。紹介頂きました宮澤和樹でございます。本日は宜しくお願い致します。私、岩手県の花巻から参りました。今さら、地図を出すまでもないとは思いますが、一応自己紹介も兼ねて出しています。

花巻はここです。この上が県庁所在地がある盛岡ですけども、今回の三月十一日の震災では、沿岸のほうは本当に甚大な被害を被りましたけれども、花巻は、このように内陸の方でしたので、揺れはかなりありましたけれども、津

波ということでは、直接は被害を受けなかったです。ただ、隣近所の親戚であったり、知人が、家が流されたとか、亡くなったという方がかなりおりますので、まだ半年しかたつてませんけども、本当に大変なことが起きたんだな
っていうふうに、今、感じています。

そういった中で、このような場所に呼んで頂いて、皆様の前で宮澤賢治という人の事をお話してできるのは本当に有り難い事です。今は委縮しておりますし、緊張もしております。何故なら皆さんは日蓮宗の僧侶の皆様ですので、そういう人たちの前で宮澤賢治のことを話すっていうのは、本当に、こう鳥肌が立つくらいなんですけども。なるべく祖父が私に話してくれた事を直接お伝えできればなっていうふうに思っています。その中から、少しでも何か役に立つことがあればなっていうふうには考えてます。

まず、賢治さんっていう人は、皆さんもご存じのように、熱心な仏教徒でもあった。元々うちは、賢治さんのお父さんの代までは浄土真宗の檀家であつたんですけども、その中でも、賢治さんのお父さんの政次郎さんっていう方は、檀家の総代をするような熱心な信者だつた。その息子である賢治という人は、小さいときから仏教講習会とかにも連れていかれて、そういう仏教っていうものには小さいときから触れていて、そういった意味での知識っていうものはすごくあつた人だつたと思います。ただ、花巻という一つの地方、地域の中で、賢治さんが段々、成長していく上で、浄土真宗っていうよりも、賢治さんのお父さんが信仰していたそのお寺の形とか、やり方とかそういったものに対して、かなり賢治さんっていうのは、お父さんと議論をしたというふうには、よく、祖父は言っていました。

その時、私は何を一番感じたかっていうと、浄土真宗が悪くて日蓮宗が良いとか、そう言う事ではなくて、岩手県の花巻っていう所で、それも町場ですね。農家ではない町場の人たちが檀家として割と多くいるお寺の中のお父さんのそういう活動とかいうものに対して、賢治っていう人は、そうじゃないんじゃないかっていう思いも、かなりあつたんじゃないかなっていうふうには、私は思っています。

賢治さんっていう人は、ある程度大きくなってからお経を勉強をしていったんですけども、その中でも法華経っていうものになりに傾倒していったというか、入っていった。そういうふうな中で、一番賢治さんが感じてたことってというのが、行動するってことだったんじゃないかっていうふうに、祖父に教わったこともあります。

宮澤賢治って人の一つの代表作でもある『雨ニモマケズ』という作品がありますけれども、この作品が、やっぱり今回の震災でも、いろんな形で世の中に出ていく機会が多くなっています。また、これは、祖父がずっと言い続けてたことなんですけども、この作品というのは、賢治さん本人が人に読んでもらおうという思いでは書いていなかったんだっていうことを、まず第一に言っていました。この作品を世の中に出そうというふうに考えた時に、高村光太郎っていう方が、うちに疎開してきてたんですけども、それが昭和二十年でするので、終戦の年なんですけども、高村光太郎先生と祖父が、宮澤賢治という人を知ってもらおうと、この『雨ニモマケズ』という作品を、やっぱり紹介するのが一番いいだろうということをお話したんですね。この作品は、本人は作品としては書いていないけども、やっぱり、世の中に出したいというようなことをずっと言っていたっていう事を祖父から聞いて居ります。

その中でも、「この部分が一番大事なんだ」ってことを、祖父がずっと言っていたのが、この前半部分の「雨ニモマケズ、風ニモマケズ」というところよりも、後半のほうの、「東ニ病氣ノコドモアレバ／行ツテ看病シテヤリ」から始まる、この東・西・南・北のこの部分『行ツテ』っていうところが一番大事なんだ」ということを、祖父は言っていました。これは、賢治っていう人は、例えば、自分がすごく知識を持っていたも、こういう事が出来るんだっていうことが分かっているも、その場所に行って、ただそこに座っていて何もしないのであればだめなんだ、何の意味もない。自分がその場所に出向いて行って、何か行動することが一番大事であって、そういうことを、自分はやっぱりやりたいんだっていうことを、考えてたと思うって言うていたそうです。

この作品の日付が「十一月三日」っていうふうに、手帳には書かれてるんですけども、賢治は、昭和八年に亡く

なるんですけど、多分、昭和六年頃に書かれたものであろうっていうふうに言われています。その頃もう、賢治っていう人は、身体はかなり弱ってきていて、自分が思うような形では動けなかった。そういう中でこういうものを書いてったっていうことは、やっぱり賢治って人も、この中に、こういうふうには生きていんだっていう思いで書いてたんじゃないかなっていうことです。ここには出てませんが、最後のページに、南無妙法蓮華經の題目が書かれている。やっぱり、それは一つの祈りのようなものだったんじゃないかっていうふうに思っています。

今回の震災で、この『雨ニモマケズ』っていう作品をインターネットを通じて、渡辺謙さんっていう俳優さんが、『三・一一 kizuna』っていうネットで、全世界に流したんですね。それがきっかけで、アメリカのワシントン D. C. の教会やイギリスのウェストミンスター寺院のほうで宗派を超えて朗読するっていうようなことがありました。そのあと、スペインにも行ったんですけども、そういったことが今も続いています。それは何でなのかなって思うと、確かに、この「雨ニモマケズ 風ニモマケズ」っていうこの部分のところからいくと、何かすごく我慢をして、世の中にあるそういういったものを受け入れて我慢しなければいけないっていうようなとらえ方もあるとは思いますが、賢治さんはそういうことじゃなくて、やっぱり、この後半部分の「行ツテ」っていうところを大事だっていうふうに思ってた。それをやっぱり、『雨ニモマケズ』っていう作品を聴いたり読んだりする人たちも、そういうものを、何か感じてくれるから、今回のこの震災っていうところではいろんな形で出ていくのかなっていうふうに、私は思っています。それは、実際、被害を受けた人たちが心のよりどころとして、この『雨ニモマケズ』っていうものを持っているっていうよりも、例えばボランティアで何かこれから自分ができることで動こうとしている人たちとか、決してそれはボランティアではなく仕事として動いているけども、自分で何かやっついこうという人たちにとっても、この作品っていうのは、ピタッとはまる部分があるからなんじゃないかなっていうふうに思っています。

宮澤賢治という人を紹介されるときに、この写真がよく使われるんですね。もう一枚は顔がもつとはっきり写って

いて座っている写真と、この二枚がよく使われるんですけども、特にこっちの方はよく使われます。例えば、『雨ニモマケズ』っていう作品とこの写真っていうのは、割とセットで出ていくときが多いんです。この写真を見ると、何か賢治さんは、不作を憂えたり、何か思い悩んで下を俯いているような、そういうイメージになるんですけども、祖父は、その『雨ニモマケズ』の内容のことを、こうなんじゃないかっていうことを話してはくれたけども、もう一ついつも話してたのが、「賢治という人は、すごく愉快な人だった。楽しい人だったんだ。いつも、人のことを笑わせようと考へてたり楽しませようというふうに考へてるような人だった。この写真も、本当は、イメージ的に暗いようなイメージがあるけど、本当は違うんだぞ」ということを言っていて、この人の、結局まねをしてるんだと。これはベートーベンなんですけども、それくらい、賢治さんはベートーベンが好きだった。

今回、この会のこと、私が監修をした本を皆さんに買っていただいて、本当にありがたいんですけども、その中にも、写真と一緒に、このベートーベンの絵が出てます。賢治っていう人はもう、その『雨ニモマケズ』の、まず第一のイメージとして、そういうストックで固いついていうイメージがどうしても出てくるけども、本当はこういう面もあった、こっちのほうが強かったっていうことを、よく祖父は話しました。このベートーベンの姿と、これは、本当によく似てるっていうふうに思うんですね。これも、ただ撮ったんじゃないで、近所に、賢治さんの二つ年下の写真館の息子さんがいたんですね。藤田屋写真館って、今でもあるんですけども、その後輩に、商売道具であるカメラを外に持ってこさせた。そこで、「ただ撮るんじゃ面白くないから、自分はこのベートーベンのまねをするんで、このへんに来たら、シャッターを押してくれ」ってことで頼んで、残ったのがこの写真だったっていうんです。ところが、これがどうしても、賢治さんって人のイメージと、『雨ニモマケズ』っていうのが一緒になってしまつて、何となく暗いイメージが先行してしまつてるところはあります。ただ、「賢治っていう人は本当に、冗談がすごい好きな人だった」ということは、よく言っていました。

賢治さんは、職業に就いたというのが、生涯では二回なんです。花巻の農学校の先生と、あと晩年に、東北砕石工場という肥料を作るような仕事に就くんですけども、最初の職業である教師をやった時期っていうのと、この写真が、大体一緒になるんです。その時に、花巻に大沢温泉っていう、割と大きい温泉があります。そこに学校の生徒さんを連れて行って、何か面白いことをしましょうと。「今日は温泉に入るのもいいけれども、そばにあるすいか畑に行って、すいかをちよっと失敬してきて、みんなで食べようじゃないか」ってことを、生徒に話したんだそうですね。そして、実際、その畑に取りに行ったら、その畑の持ち主が出てきて、すごい剣幕で怒られたっていうんですね。生徒は、すぐくも怖がって、とんでもないことになったっていうふうで逃げてきたっていうんですけどね。実際そのすいかは食べたんだんですけども、実際は賢治さんっていうのは、その前日に、その農家のかたにお金を払って、「次の日、生徒と一緒にすいか取りに行くから、よろしく頼みますよ。でも、どうか、怒って出てきてくれ」っていうようなことを頼んでたみたいですね。そういう事を、すぐくするような人だったんです。

あと、やっぱり学校の中でも、教科書をあまり使わなかったっていうんです。型にはまった授業っていうのは、殆んどやらなかった。時たま、学校の教室の中で面白い話をして、みんなをびっくりさせたり、あとは、演劇とかそういうものを生徒さんにやらせようとしたっていうんですね。それは何でなのかなっていうと、これは、賢治さんの「イーハトーヴ」っていう一つの言葉につながってるんですけども、賢治さんはその「イーハトーヴ」っていう言葉を、言ってみれば造語なんですけど、これは、エスペラント語風に、多分、岩手っていう地名を言ったんであろうっていうふう言われてるんですけども。ただ、この「イーハトーヴ」っていう言葉は、賢治さんにとっては、決して、岩手県だけを限定して言っているわけではなくて、自分が立っている場所がイーハトーヴであるっていうふうに考えてみたいです。これは、『注文の多い料理店』っていう、賢治さんが生前、二冊しか出してない本の一冊の広告文の中にも書かれているんですけども、イーハトーヴっていう所は、結局、自分たちがこの世の中を、何とかいい

場所にしたいとそういうふうには思い願って、動いている人たちが住んでる場所が、もうイーハトーヴであるというふうに考えてたのではないかなって思います。

先ほど言ったような、「行ツテ」っていう言葉と、段々繋がってくるんですけども、その中の一つの間が、やっぱり、幸せだっていうふうに見える生活の中には、今、芸術っていうふうに言われてるように壁を作って分野を分けられているようなところの、例えば、絵を見たり、描いたり、演劇をしたり、自分たちで演じてみたりとか、あとは音楽を、やっぱり奏でる。そういったものも生活の中に入っていけないと、自分たちの生活っていうのは、やっぱり向上していかないと考えてたと思うんです。そういう中で、やっぱり賢治さんは、学校の中で演劇っていうのも、生徒さんたちにやってもらいたかったんだと思うんです。

その中の一つの例として、賢治さんの作品の中に、『グスコープドリの伝記』っていう作品があります。これは元々、『ペンネンネンネン・ネネムの冒険』っていう、一つの別の作品があったんですけども、それは全く、人間じゃなくて、妖怪とか化物っていうか、そういうものが出てくる作品だったんです。ところが、それを学校で演じようと思ったときに、あまりにも、小道具的にそういうのが無理だったわけですね。化物がいっぱい出てくるもんですから。それを、ある程度演じやすいようにっていうか、もつとみんなが感情も移入できるようにってことで人間に置き換えていったのが、『グスコープドリの伝記』っていうふうな形になっていったっていうふうにいわれています。だから、これは一つの脚本として、多分書いたものなんじゃないかなっていわれています。そういうことを、やっぱり、賢治さんは学校の中でやりたかったわけですね。

あともう一つは、学校を辞めた後に、賢治さんは、羅須地人協会っていうものを始めるんですけども、その中には、特に賢治さんはセロ（チェロ）を弾いてました。ここに集まってくる人たちにバイオリンとかピアノを貸したり、あげたりして演奏しようとしてたわけですね。実際、演奏をしてたんですけども、そのためには、やっぱり、それなり

の練習はしなければいけないし、それなりに知識がないと、そういうことはできない。やっぱりみんなが米を作りながら、野菜を作りながらも、そういうものが身についていかないと、やっぱりほんとに幸せだって感じられる部分が少なくなってくるっていうふうに、多分、賢治さんは考えたと思うんですね。そこで、賢治さんは、やっぱりセロを演奏しました。賢治さんにしてみれば、多分弦楽四重奏というものを一番やりたかったと思うんですけども、今宮澤賢治記念館の館内には、その賢治さんが使っていたセロと、妹のとしさんが弾いていたバイオリンと、あともう一つは、譜面台が展示されています。その譜面台が、四人が円になって譜面を見れるような形になっているんですけども、譜面台が四面あるんです。それは、賢治さんが自分で設計をして、鍛冶屋さんのほうにそれを持って行って、「こういう譜面台を作ってくれ」って、わざわざ頼んで作った物みたいです。それで、やっぱりそういう演奏をしたい、そういうふうに考えてたみたいです。だから、かなり賢治さんっていうのは、そういう人と一緒にどうやったら楽しめるのかとか、そういうことを常に考えてた人で、やっぱりそこに、当然生活するために必要な労働ってものもあるけれども、それをどういうふうに楽しいものにしていくかっていうことを、常にこうやっぱり考えてた人なんではないかなと思います。ただ、そういうことをずっとやっていくと当時は、共產主義的な思想を持つてる人間ではないかっていうふうに周りから思われたりする。実際、そういう時期もあったみたいです。賢治さんは、学校の中でも少し考えがそつちのほうに偏ってる人間じゃないのかなとか誤解された時期もあったみたいです。ただ、本人にしてみれば、全くそういう気持ちはなくて、ほんとに、「イーハトーヴ」っていう一つの世界を実現させようと思って行動してたことにしかなかったっていうふうに言ってます。

もう一つ、先ほど言ったように、紹介されるときに使われる写真っていうのがあるんですけども着てる服っていうのが、鹿革のジャケットなんです。何で鹿の革のジャケットかっていうと、お父さんの政次郎さんっていう人は古着、質屋業っていう職業をやってたんですね。それで、元々うちにあった物なのか、質草で流れた物なのかは分からない

けれども、陣羽織があつたんだそうです。陣羽織っていうのはよろいの上から羽織るものですので、かなり大きめにできているし、あと裾がすごく長かつたんだそうです。その代わり、袖がないんですね。賢治さんはそれを洋服屋の仕立て直しをしてもらうとこに持って行って、ジャケットに仕立て直してもらって着てたそうです。それがこのジャケットだつていうんですね。多分、着る物とかそういうものに興味ない人であれば、そういうことは全くしないと思うんです。でも賢治さんは、やっぱりそういうことをやってた人です。

賢治さんは山に登ることがすごく好きだったんですけども、特に岩手県の岩手山というところには何回も登っていますけど、そのときに必ず持っていった食べ物っていうのが、一つは、かつおぶしだったそうです。かつおぶしもすつたものじゃなくて、砕いたものを、あめ玉ぐらいの大きさにして、おながが空けばまず口の中にボンと入れる、そうすると味がずっと出続けるので、空腹を抑えられる。あと、その他に持っていったのが、チョコレートとか、当時出たばかりのキャラメルのような物とか、そういう物を見つけると、そういう物を買って山に持って行って、一緒に行った人にあげたりしてたつていうんです。その当時のチョコレートとかそういう物は一般の人たちはそんなに食べてる物じゃないんですけども、賢治って人は、それをすぐ「あつ、これは甘い。体が疲れたときに、これはいいもんだ」つていうふうにして持って行った。だから、新しい物つていう物には、すごく賢治さんは敏感で、特に洋物つていうか、西洋つていうか外から来た物に対しては、すごく、やっぱり敏感だったみたいです。

そういう食べ物一つ取つても、例えば、東京に来たときは、丸善つていう、本屋さん、今でもありますけども、そこで、やっぱり自分で書く原稿用紙なんかもよく買つてたんですけども、その当時出たばかりのハヤシライスつていうのを食べてるんですね。そのハヤシライスつていうのは、丸善の社長であるハヤシさんが、家に来た人たちに、賄い食として作つてた物を店を出すようになったつていうふうにいわれてるんですけども、そのハヤシライスつていうものが出たときにもすぐ、賢治さんは丸善に行つて、そのハヤシライスを食べたり、あとは、築地に劇場があつ

て、そこでは演劇があると、もう演劇が大好きでしたから、そこに行つて見たり、あと浅草のほうでは、田谷力三さんつていう人の浅草オペラとか、そういうものもよく見てたつていうんです。だから賢治さんつていう人は、多分、身近な花巻の中で農業をやっている人たちに限らず、貧しい人たちの生活つていうものを目の前で見ていながらも、東京ではこういう文化があつて、こういう物も食べられてる。あと片一方では、山というものに行けばこういう世界が広がつて。そういうものを、いつも自分で吸収して、一つの、やっぱり作品として、ああいう、詩にしても童話つていわれているものにしても、一つのアイデアとしてどんどん取り入れていったと思うんです。これが、やっぱり片一方だけじゃあ、やっぱりできなかつたつていうふうに思うんです。いわゆる賢沢つていうか、そういう面とあと身の周りで起きてる、そういう、冷害が来れば人がもう餓死寸前までなつてしまふような状況を見ていて、自分でもそれなりに体験していった。そういうことが、賢治さんにとっては一番大きいことじゃなかつたのかなつて思うんです。だから、もし賢治つていう人が東京とかそういうところに住んでいけば、きっと、そういう形としては、作品はきっと残らなかつたんではないのかなつていうふうに思います。

こっちは賢治さんです。こっちが弟の清六で私の祖父です。この二人が一緒に並んで移つてる写真つていうのは、もうこれしか残つてなくて。何でかつていいますと、昭和二十年に花巻も空襲に遭ひまして、うちは全部その空襲で焼けたんですね。うちにあつた写真とか、賢治さんが読んでいた本であるとか、そういうものは、もうほとんど焼けて、遺品も、着ている物も焼けて残つてなくて、外に散らばつていた写真を集めた中にこの写真が残つてたつていう形なんです。祖父と賢治さんが一緒に写つてる写真つてのは、この一枚しか残つてませんでした。これは、祖父が志願兵として軍隊に行つたときに、賢治さんが弟の清六を心配して面会に行つたときに一緒に写した写真だそうです。仙台なんですけども、そのときに二人で並んで、祖父は大体二十代前半、賢治さんもまだ二十代です。三十歳になる前ぐらいですね。ここで二人で写つてると、ほとんど、この背格好が一緒です。肩の高さとか見ると、大体

身長が一緒ぐらいなんです。私が、林風舎というところで、外から来たお客さんとお話すると、よく聞かれるのが、「賢治さんは、身長はどのくらいだったんでしょか？」って、よく聞かれるんですね。そうすると、賢治さん本人は、よく人に聞かれると、「五尺五寸五分」っていうふうに答えていたんだそうです。五尺五寸五分って言われてもすぐピンとこないんですけども、私は。大体、百六十七から百六十八センチぐらいだった。祖父も、やっぱりそのくらいの身長でしたので、この写真を見ると、ほとんど一緒なので、やっぱりそのくらいだったんだらうな。当時の身長としては、決して低いほうではなかったと思うんですね、賢治さん。割とがっちりしてたし、特に足腰が強かったです。ですからもう、山にも何回も何回も登って、ああいった作品もいっぱい書けるようになったんです。この写真では、もちろん分らないんですけども、「血液型は何型だったんでしょか？」っていうのをよく聞かれるんですね。女の人がよく聞くんですけども、そうすると、私の祖父はO型でした。多分、賢治さんのこういう、性格っていったらあれですけど、ほんとに推論でしかないけども、多分賢治さんもO型だったんじゃないのかなあっていうふうには思うんです。でも、これも本当かどうかは分かりません。

でもこの二人は、年が八歳離れてました。賢治さんは五人兄弟だったんですけども、一番上が賢治さん、その次が妹のとしさん。その間にもう一人女の兄弟がいて、その次に祖父の清六。そしてもう一人、また女の子っていうような兄弟でした。ですので、五人兄弟のうち、二人しか男兄弟はいなかったんですね。賢治さんは、結局結婚をしてませんし子どももいませんでしたので、元々商売つものに對しては、全く興味がないっていうか、やる気がなかったですから、祖父が花巻での商売つものは継いでったんです。でも、賢治さんしてみれば、やっぱり自分が本当であればやるべき家業を弟に任せてしまったっていう気持ちもあつたみたいで、祖父は、お父さんの政次郎さんがやっていた古着、質屋業っていうものをやめて金物屋に商売替えをしたんですね。商売替えて言っても、すぐできたわけじゃなくて、「かなり苦労したってことは言っていましたけど、その中でよく売ってたのが、ベアリングだった。機

械の中に埋め込むベアリングですね。そのベアリングのカタログを、賢治さんは、ガリ版刷りで書いてカタログを作
って、みんなに配れるような物を書いたりしてらるんですね。だから、そのぐらい弟っていう人、清六っていう人に対
して、申し訳ない、自分もできることは手伝う。そういうことを、ずっとやってたみたいです。

やっぱり私の祖父も、八歳年が違うお兄さんの賢治っていう人が、大変好きだったと思うんですね。いろんなこと
を教えてくれたってこともあるけれども、やはり言っていること、やっていること、成功したとか失敗したっていう
のは、いろいろあるとは思いますが、やっぱりお兄さんっていう人をすごく尊敬して、好きであつたと思っ
ます。

賢治さんは昭和八年に亡くなるんですけども、そのあと祖父は、賢治さんの残した作品を世の中に出すためにずつ
と、やっぱり動いていたんです。そのときに、やっぱり、一番の原動力になったっていうのは、お兄さんという人が、
やっぱり好きであるし、尊敬できる人であるし、あと残した作品っていうのが、素晴らしいというふうに思ったから
だと思えます。ただ、それだけでは、やっぱり、出版社に、その残された原稿を持っていつて活字にするっていう
仕事は続かなかつたと思えます。っていうのは、兄弟の、言ってみれば、ひいき目っていうか、家族のひいき目と
か、そういうものがあるんじゃないかっていう、やっぱり、いつも自問自答のようなものも、祖父はずっと持った
と思うんです。ただ、そこに高村光太郎っていう人が、花巻にやってきて、祖父のことを、「あなたのお兄さんの賢
治っていう人の残した作品っていうものは、世の中に、やっぱり出していかなきゃだめだ」ってことを、ずっと言い
続けてくれたわけです。それが、やっぱり祖父にとってみれば、お兄さんの作品を世の中に出すっていうモチベー
ションのようなものを、ずっと保ち続けてくれたんだと思うんです。だから、光太郎っていう人がいなければ、今の
宮澤賢治っていう人も残らなかつた可能性があります。そのくらい、やっぱり恩人ではあつたと思います。

光太郎さんは、先ほども言いましたけども、昭和二十年に花巻に疎開してくるんですけども、そのときに、うちに

はまだ防空壕っていうものがなかったんです。もちろん、光太郎さんも、疎開してくるわけですから、花巻っていうところは田舎なわけで、まさか、そこに空襲があるっていうふうには思ってたんですけども、ただ、光太郎さんはやっぱり、来たときにすぐ、「防空壕を掘ったほうがいいんじゃないか？」っていうふうに、祖父に言ったんです。祖父も、その言葉をやっぱり信じて、防空壕を實際掘って、そこに賢治さんの原稿の半分と、あと手紙の類ですね。遺書とか、そういった手紙の類。もう半分は、土蔵のほうに分けて入れたって。実際、八月の十日に花巻は空襲に遭うんですけども、それが終戦の五日前になるわけですけど、祖父は一人だけ、その防空壕の中に残って、その原稿を、やっぱり守ろうとした。家族はみんな郊外のほうに逃げていったんですけど、祖父だけ一人残って、防空壕の中にも、やっぱり、周りがどんどんどんどん、燃えてますから、蒸し焼き状態ようになってきた。防空壕の木の扉も焼けてきた。そのときに祖父は、備蓄してたみそで、まず目張りをしたっていうんですね。すき間に、みそをペタペタペタ塗って、火が入ってこないようにしたわけです。そのあとに、今度は、しょうゆをかけたって言うんですね。かなり、こうばしいにおいがしたと思うんですけども、そういうことをして、今の原稿の半分は残ったんです。

もう半分のほうのは、土蔵そのものは燃えなかったんですけども、土蔵の裏のほうにねずみの穴が開いてたんです。その穴のところに炭を積んでた。その炭が、やっぱり燃え続けていて、その小さい穴からずっと火が入って、蒸し焼き状態になってたんです。祖父も、火が収まってから、すぐ開けようとしたらば、近所の人や、「今すぐ開けると、中に一気に空気が入って、バックドラフトっていう、火が一気に燃え上がるから、開けるな」って言ったんだそうです。祖父も「そうか」っていうことで、しばらく開けなかったんだそうです。ただ、その間中、ずっと、中で蒸されてましたから、その半分のほうの原稿っていうのは、茶色く焦げてます。ほとんどが触ると、ばらばらっと崩れるようになってます。今、全部、それは記念館のほうに入ってますけども、ただそういう形

で、『注文の多い料理店』っていう童話集と、『春と修羅』という詩集の本になった以外のものを、祖父はずっと、その原稿を基に本にしていってたんなんです。ですから、その焦げた物なんかは、もう字が読み取れるか取れないかぐらい分からない物もいっぱいあったんですけども、そういう、やっぱり作業をし続けたっていうことは、かなりの根気とエネルギーが必要だったんじゃないかなっていうふうに思います。でも、そこにはやっぱり光太郎さんっていう人がいたっていうのは大きかったです。

これは、花巻にある、『雨ニモマケズ』の詩碑です。これが、今、日本全国だと、小さいのも合わせると二百基ぐらいの賢治さんの碑があるんだそうですけども、その一番最初にできたのが、この『雨ニモマケズ』の碑なんです。

この文字を書いたのも、高村光太郎さんです。この書かれてる文字、これでは、ちょっと分かりづらいかもしれないですけども、この『雨ニモマケズ』の碑なんです。先ほど言ったように、「雨ニモマケズ 風ニモマケズ」という前半部分は書かれないっていうか彫られてないんです。後半の「野原ノ松ノ林ノ陰ノ……」から始まって、先ほど言ったような、「東ニ病氣ノコドモアレバ行ツテ……」のところです。その後半部分が、ここでは、彫られています。ですから、やっぱり、祖父にしても光太郎さんにしても、この作品に関しては、『雨ニモマケズ』っていう作品に関しては、この部分をどうしてもみんなに読んでいただきたいんだっていう思いが、きっとあったんだろうなって思います。

もう五十年以上たってるんですけども今、殆んどこの文字っていうのが、かすれてきて読み取れないぐらいなんです。だからこれはかなりできてすぐ撮った写真なんで、このくらいはつきり見えるんですけども、今、そばにいても、なかなか、このくらい読み取れない状況です。ただ、それがやっぱり、賢治っていう人を世の中に出そうとした、祖父と光太郎さんの、やっぱりその思いっていうか願いが、ここの中に入っているって思うんです。

賢治さんが、やっぱり一番の言いたかったこと、伝えたかったことっていうのは、これも祖父が言ったことです

けども、「賢治の作品っていうのは、童話っていわれている部分と、あと詩集とか詩のほうと、二つに大きく分かれるんだ」って。詩のほうは、すごく、自分のこと、私の事をいっぱい入れてるけれども、童話っていわれているところには、その私というものがほとんどないんです。自分っていうものを童話っていわれている部分には書いてない。何でかっていうと、その根っこにあるのが法華経だからだと言ってました。

結局賢治さんしてみると、自分なりに法華経っていうものを解釈したことを、今度人に伝える方法として取った方法が、いわゆる童話っていう形を取ったと思うんです。ただ、童話とはいわれていても、決して幼児、幼稚園とか小学校低学年の人たちに理解できるようにっていうような形では書いてないですね。これも、先ほど言った『注文の多い料理店』の初版本の広告文の中に書いてるんですけども、「この作品は、一番は思春期の人たちに読んでもらいたい」ってことを書いてます。ところが、その広告文の中には、「思春期」っていう言葉を使ってないんですね。「アドレッセンス中葉」っていう言葉を使って、これは大変、すぐには分からないような書き方をしてる。でも、そういう年齢の人たち、だから、「中学校とか高校とか、今で言う大学生くらいの人に、まず一番最初に読んでもらいたいの、この、いわゆる童話といわれている部分です」っていうふうに書いてるんです。それは、やっぱり、法華経というものを、何とかみんなに伝えたい、そういうふうを考えてみたいんです。

賢治さんは亡くなるときに遺言として、「『国訳妙法蓮華経』を千部作って人に配ってほしい」と、そういう事を言い残して、遺言の一つとして残していったんです。そのお経を祖父はずっと、殆んど毎朝毎晩、読んでました。それは、決して声に出して読み上げるのではなくて、仏壇の前ではあつたけれども、読んでました。それは、一字一句、分かる、理解しようとするような形で、それも、一日このくらいというふうに、少しずつではあるけれど、読んで、また元に戻って読んで、そういう事を、ずっと続けてました。だから、祖父にしてみても、賢治さんがこういうふうに書いてるこういうふう読んで。でも、自分としては、また違う読み方があるんじゃないかと、いろんなことを

考えながら、きつと読んでたと思うんですけども、そのくらい、やっぱり難しいっていうこともあると思うんですが、やっぱり、賢治さんしてみると、自分の考えていることを一つの形として取ったのが、その童話っていわれている部分なんだ。そこを、やっぱり理解してもらいたいってことは、祖父は言っていました。

もう一つ、『農民芸術概論』っていうのがあるんですけども、それは、言ってみれば一つの、木で言う幹の部分だと。そこから枝葉が広がっていったのが童話だっていうんですね。そして、根っこっていうのが、その法華経そのものだっていうふうに言っていました。

それからもう一つ、祖父が『国訳妙法蓮華経』を読んだときに、大事だと思うところを、赤い色鉛筆で線を引いてたんですけども、一箇所だけ、赤と青で二重に引いている部分があったんですね。それが、『提婆達多品第十二』の部分です。その部分の、あるところを二重線で引いてたんですね。「三千大千世界を観るに、乃至芥子の如き許りも是れ菩薩にして生命を捨てたもう処に非ることあることなし」っていうところ、そこに、下手くそで申し訳ないですけど、そこを、二重線で引いてたんですね。これは、多分、賢治さんが、祖父に言ったことだと思うんですけども、ここが一番の、言ってみれば、賢治さんにとっては大事なことだったっていうふうに言っていました。だから結局、どんな小さなものにも菩薩はいるんだっていうことを、私の浅い知識では、そういうふうには思ってるんですけども、結局賢治さんも、本当に自分が生かされている世界そのものが、もう、菩薩というか、崇拜する対象だったんだと思うんです。賢治さんしてみると、この法華経そのものも、あと、他の仏典にしても、やっぱり一つの、何か羅針盤のように見てたような気がするんですね。だから決して、それを唱えれば、死後、極楽に行けるとか、そういうことではなくて、今、生きている自分たちがどういいうふうに生きるかっていうことをここから学ぼうっていうふうに、やっぱり考えてたんじゃないかなと思います。

賢治さんしてみると、本当に尊敬できる人物としての日蓮聖人であったり、やっぱり釈尊であったり、そういう

人たちだったと思うんです。本当に拝む、本当に崇拜する対象としては、何か自然そのものだったというふうに、すごく感じるのです。賢治さんが、これも一つ、祖父にポツと言ったことが、「自分は縄文人である」っていうふうに言ったんだそうです。「縄文人でありたい」ってことだと思っんです。縄文人でないってことは何かって言えば、弥生人ってことになるのか、そこもはっきりしないんですけども、ただ賢治さんは、「自分は縄文人だ」と、そういうふうに言ったっていうんですね。それは何なのかなあっていうふうに思うんですけども、やっぱり、その縄文っていう人たちは、結局、山の中の生活をしている人であつたり、あと、その頃であれば、岩手県であれば、「蝦夷」とかって言われてたような人たち、あと、九州のほうだと、やっぱり、「熊襲」って言われてたみたいだけれども、そういうような生活をしてた人たちってことになるのかなって思うんです。そういう人たちの、やっぱり考え方っていうか、多分、これも簡単、こんなことじゃないのかもしれないけれども、八百万の神っていうか、そういうものに対しての信仰っていうものが、やっぱり根っこには必ずあるんだってことを言ってるような気がしました。

でも、決して、賢治さんは、自分が縄文の血を引き継いでるから縄文人であるってことではなかった。元々、うちには、ルーツをたどると、近江商人だったみたいで、琵琶湖周辺から岩手のほうに流れてったというか、江戸時代に南部藩と一緒にいったんだっていうふうに言ってます。だから、そういうことから考えれば、ほとんど弥生人、弥生の人間じゃないのかなっていうふうに思うんです。ただ賢治さんしてみると、縄文のそういう物の考え方のようなものも自分の根っこにはあるってことを言ったって言ってます。

花巻っていうところは、阿弓流あてるい為ゐっていう、花巻に限らず、岩手県に、阿弓流あてるい為ゐという人がいました。その人は、結局、坂上田村麻呂に殺されてしまうんですけども、征夷大將軍。そういう人たちの、やっぱり歴史っていうものも、賢治さんはずっと調べて、いろんなところで知ってたみたいです。賢治さんがその一つの作品の中で、阿弓流あてるい為ゐのことを「悪路王」っていう表現を使ってるところがあるんですけども、これは、本当に、悪路王って言ったのは、田村

麻呂の側のほうからの言い方なんです。それに対して賢治さんは、その阿弓流為っていう人に対して、すごく同情してる部分もあって、あともう一つは、やっぱり、藤原三代の平泉のあその部分、藤原家のこととか、そういう、外から攻められて滅んでいった歴史っていうものを、すごく、やっぱり調べてるんですね。そういった人たちのことに對して、すごく同情をしている。

あともう一つは、よく、賢治さんの童話の中で、「山男」っていうのがよく出てくるんですけども、それは、例えばマタギであったりとか、そういう人たちに対しても、すごく賢治さんは好意を持ってたんですね。山での生活をしている人たち、例えば山で熊を取って、熊の皮とか肝を売りにきてるような、そういう人たちに対して、賢治さんはすごく、そばに行つて話したいようなそういう人だったみたいです。そういう人たちとどういふことを話したかは、はっきりとは分からないけれども、そういう人たちに対しての、やっぱり、何か好意っていうものは、すごく感じています。だから、多分、そういう自然に対して生かされてるってことを身をもって分かっているような人たちのことを、賢治さんは、すごく大事にしてたんじゃないのかなっていうふうに、僕、今感じてます。

質疑応答

司会 どなたでも、何でも結構でございます。質問がございましたら挙手をお願い致します。

質問 1 私、石原莞爾の研究をしているのですが、同じ国柱会の会員であった、宮澤賢治と石原莞爾に、何か接点があったのかどうかということをお伺いしたいと思います。

宮澤 国柱会に賢治さんが行ったときには、すでに石原莞爾さんは、言うなれば上層部の人で、賢治さんは、最初は

門前払いを食らうような人だったので、直接の接点はなかったようです。ただ、賢治さんというよりも賢治さんのお父さんの政次郎さんが、その当時の石原莞爾という人の考えや、満州に抱いていた夢に対して、何か共感する部分もあったのではないかと思います。

例えば、先ほど言った、『国訳妙法蓮華経』の一部を、政次郎さんが、「石原莞爾様」と名前を書いて直接送っているのですが、そういうことも考えると、石原莞爾という人は、立正安国という世界を何とか実現しようと実行した人ではあると思います。それがあまりにも、理想が高すぎるところもあって、最後には外に出されてしまうという流れがあったと思いますが、その最初の頃の石原莞爾さんに対して、政次郎さんは、やはり何か共感するところがあつたと思います。

質問1 ありがとうございます。

司会 実は昨日、個人的に伺ったエピソードですけど、宮澤賢治の遺言の一千部のうちの一部分が石原莞爾に渡っていったなんて話は私も存じませんでした。他に質問はいかがでございますか。

質問2 日下というお医者さんがいまして、話を聞いたのですが、その人、自慢するのは、二十ぐらいいのときに、築地小劇場というところに参加されていて、賢治さんが亡くなった翌年に、千田是也という創立者と一緒に行き、『風の又三郎』の演劇の許可をもらったそうです。それで、「われわれが一番最初に、宮澤賢治の『風の又三郎』っていう芝居を打った」ということを自慢しておりましたが、本当でしょうか。本当だと思うのですが。

宮澤 本当だと思えます。築地小劇場あるいは築地劇場、おそらく、同じものだと思いますけども、そこに、賢治さんがよく観に行つたそうです。今は、跡地に碑しか残っておりません。その話も聞いたような覚えがあります。賢治さんも、その演劇には、すごく興味があつたようですが、賢治さんはどちらかというと、文系よりも、理系の人間だつたようです。理系でも、科学者だつたので、その一つの表現として、科学の用語等をよく使つています。

何か一生懸命、科学と宗教を結びつけようと思えるように、その演劇という表現の方法のことも、いろんなことを考えていたように思えます。

司会 では、そちらのかた。

質問3 宮澤賢治という呼び捨ては、絶対いけませんね。和樹先生が、賢治さん、「さん」って呼んでいたんですよ。僕たちが賢治、賢治と呼び捨てでは、絶対だめだと思いますので、これからは、賢治さん、様、お上人、賢治上人と言うくらいなの。先程、和樹さんが僕たちの前で、「鳥肌が立つ」と言っていました。反対です。僕の方が、鳥肌が立ちます。今日、お目通りすること、本当に光栄です。ありがとうございます。

いくつか、質問をさせていただきたいと思えます。私たちは今、音楽的な側面から、仏教讃歌を、CDで捧えていますけど、明治時代に仏教讃歌、多く作られてきましたけど、賢治様は二曲、「星めぐりの歌」を作られています。NHKで今年に放送された番組で、藤原真理さんがチェロで演奏して、宮澤賢治様のオマージュをすり切れるほど、何十回と聴きました。素晴らしいです。その曲を今、ハンドチャイム用に編曲しまして、世に出せうと思つています。

それで、次が、「雨ニモマケズ 風ニモマケズ」という、この素晴らしい詩を、賢治様の精神をしつかり伝えてほしいと、英語、フランス語、ドイツ語にしても。それで、著作権も過ぎていゝるんですけども、それを作ったときに、和樹様のほうへお送りしまして、世に出したいと思っております。

「星めぐりのうた」も、チャイムですけども、日本語と英語ぐらいにさせていただけます。英語のほうは、NHKで放送したとき、ロジャー・パルバースさんが、『雨ニモマケズ』は強い雨だから、『ストロング・レイン』って、そういう思いで訳されていると思いますけど、そんな中で、日蓮宗でも、英語の達者な、堪能な方がおり、お願いの交渉をしておりますので、作られたら、送っていただきたいと思っております。

仏教讃歌は二十二曲作りますが、それも全部、英訳にしたいので、『雨ニモマケズ』『星めぐりの歌』は英訳にさせていただきます。またお知らせしますが、よろしくお願い致します。

宮澤 ありがとうございます。セロというか、音楽でまた思い出しましたが、一九九六年に宮澤賢治の生誕百年というのがありました。その時に、有名なチェリストのヨーヨー・マさんが花巻にやってきて、賢治さんのセロを弾くというイベントがありました。そのときに、ヨーヨー・マさんが賢治さんのチェロを鳴らしているときに、「二番目の弦が、すごく遅れて鳴りますね」と、ヨーヨー・マさんが言いました。これは、『セロ弾きのゴーシュ』という作品の中で、最初は猫が出てきて、次にかっこうが出てきて、その次にたぬきが出てきて、あと、猫の次に四匹出てきます。その中で、たぬきが賢治さんと一緒に練習をします。そのときに、そのたぬきの、子だぬきが、「何か、ゴーシュさんのセロと一緒に練習すると、この二番目の弦を鳴らすときに、僕のほうがつかえるような気がする」ってことを言うんです。ということは、賢治さんのは、自分のセロの癖を分かっている、わざとその『セロ弾きのゴーシュ』の中に織り込んでいたのだと思うんですね。

多分、『ゼロ弾きのゴーシュ』という作品をヨーヨー・マさんは読んでいなかったと思うんです。でも、そこで、世界で一番といわれているヨーヨー・マというチェリストが、言ったというのは、すごいゾワゾワとしたんですけど、やっぱりこういうのはあるんだなあと、すごく思ったのを、今、思い出しました。

司会 他にいかがでしょう。

質問4 『風の又三郎』という映画を、私、昭和十四年、小学校二年生のときに、学校に巡回がきて観ました。そのとき、もうすでに賢治は世に出たのでしようね。その中で、ベーターベンが出ましたけど、あの歩いている姿は、第六番の田園交響曲のシーンで、もうすでに、耳が聴こえないけども、音楽で世に知らしめようということだったのかもしれない。

当時、おそらく賢治さんは、レコードをずいぶんご自分でおかけになったのではないのでしょうか。

宮澤 自分で買って、かなり聴いていたそうです。

質問4 その蓄音機は残っていますか。

宮澤 蓄音機も焼けて、もう、残っていません。

ただ、先ほど言ったように、「田園」は特に好きで、詩集『春と修羅』の中の「小岩井農場」という詩があるのですが、詩に、「田園」を流して読むと、ほぼ、ぴったりと収まるそうです。だから多分、「田園」に合わせて

作ったものだろうといわれています。

質問 4 なるほど。だから、耳が聴こえないし、非常に不幸だけれども、音楽は非常に明るい音楽であるように思いますね。ありがとうございました。

司会 他に何でも結構でございます。

質問 5 先日、あるお上人から、賢治さんとお父上の政次郎さんの法論の記録が残っているらしいという話を聞いたのですが、実際にそういった類の物は残っているのでしょうか。

宮澤 それは、保阪嘉内さんの関係ですか。

質問 5 私も、その方のことは、よく分からないのですけども。

宮澤 賢治さんの盛岡の高等農林の同級生の一人に保阪嘉内という人がいて、その方、山梨出身の方で。賢治さんが最初に読んだと言われている『漢和對照妙法蓮華經』をあげた人です。賢治さんが、その保阪嘉内さんにあげていて。現在、その山梨の保阪さんの家に、その『漢和對照妙法蓮華經』はあるのですが、そちらのほうでの何か記録が残っていて、そういうお話なのかなと思いました。

私を知っている限りでは、お父さんの政次郎さんと賢治さんが、そういう、宗教について話したという文章が

あるというのは聞いていません。

質問5 分かりました。ありがとうございます。

司会 そんなに対立を激しくしていたのではないというようなお話を、私は昨日承りましたが。

宮澤 はい。祖父とか周りの人たちが言っていたのは、決してあれはけんかではなかったと。本当に議論であったし、

賢治さんは賢治さんの物の考え方で、政次郎さんは政次郎さんで、自分の今までやってきたこと、経験したことで話していたということは、よく聞いています。だから、決してけんかではなかったと。ただ、はたから聞いていると、あまりにも激論だったので、みんなハラハラして聞いていたということは、よく言っていたんですね。でも、最後には、政次郎さんは、賢治さんと二人で一緒に比叡山まで行っているんですね。多分、そういう気持ちで、やっぱり二人でこう治めようという気持ちも、きっとあったのではないのかなと思います。

あと、最終的には政次郎さんは、花巻にある身照寺に、自分の家のお墓を移します。浄土真宗のお墓から日蓮宗のお寺にお墓を移すのですが、それに約十年かけているんですね。そのときの政次郎さんの気持ちは、多分、賢治という人を認めたから、そういうことをやったのではないかなと思います。賢治さんが言っていたことに對して共感した部分があるから、そういう行動、結局は宗派を変えることになったと思います。ただ、政次郎さんにしてみても、そのとき、檀家の総代をやっているようなところから抜けて別のお寺へ移る、それも、元々、花巻には日蓮宗のお寺が無くて、布教所のような形でしかなかったそうです。それを、賢治さんが「法華堂勸進文」というものを書いて、それから、また十年かかってお寺という形になったそうです。そこにお墓を移してい

るんですけど、そのお墓っていうのが、今でも「骨堂」というふうに書かれています。賢治さんの供養塔としては、五輪の塔が立っているんですけど、隣のお墓には骨堂。でも、それは、元々あった浄土真宗のお墓をそのまま持ってきたから骨堂となっている、他の檀家さんのお墓は、みんな、「南無妙法蓮華經」が書かれている。そういうことを考えると、政次郎さんという人も偉かったのだろうなというふうには思います。

司会 他に、いかがでございましょう？

質問6 岩手の西山でございます。今日は久しぶりに和樹さんのお話が聴けて、とても有意義な時間を過ごさせていただきました。

三年ほど前に、林風舎さんにお伺いしたときに、尼僧さんと一緒に行ってお話をしたのですけれども、そのときにも、ちょっとお話が出たのは、「日蓮宗は法華信者に宮澤賢治という有名な人がいるのに、なぜ、宗門は宮澤賢治を利用しないのか、活用しないのか」っていうようなことを、その尼僧さんがおっしゃってりました。私もそれは、同じ岩手県人として、もったいないなというふうに、率直に思いました。

ここで、宮澤和樹さんに聞きたいのですが、宮澤賢治が生誕百周年のときは、岩手県で大会をさせていただきましたけれども、震災をきっかけにどうか、『雨ニモマケズ』という詩が、またクローズアップされまして、宮澤賢治という人物、作品が見直されています。今後、和樹さんなりに、例えばこういう講演を、東北地方、北海道地方、九州地方とか、そういう形で講演をしてみたいとか、今後、宮澤賢治を法華信者として、こういうふうに広めてほしいとか、そういう思いがございましたら、お聞かせ願いたいと思います。

宮澤

よく、『雨ニモマケズ』という詩を紹介するときに、「最後に、『南無妙法蓮華經』の曼荼羅があるから、あれも含めての『雨ニモマケズ』じゃないのか？」っていうふうに言われる場合がある。確かに、そうだと思うんです。ただ、そのことで、今度、『雨ニモマケズ』という作品を、例えば、他の宗派の人が何かで言いたい、使いたい、といったときに、そこに「南無妙法蓮華經」って書いていることで、ブレーキがかかってしまうのは、やっぱり悲しいことだというふうに思うんです。

大変間違っている言い方かもしれないけれども、賢治さんは、日蓮聖人のことをすごく尊敬していたと思うのですが、でも、その上というか、その奥には、釈尊がいて、そこから、ずっとつながっているものとして、とらえていたと思うんですね。だから、そこがちゃんとつながって行って、その中で、この宮澤賢治っていう人がいろんな形で出ていけばいいなあというふうには、私も思います。

以前、京都に行ったときに、龍谷大学で、二、三百人ぐらいの龍谷大学の学生さんの前で話したのですけれども、でも、学生さんのほうにしてみれば、出席もかかっていたので、みんな、いっぱい出てきたと思うんですけども、そのときに、やっぱり言われたのが、「何で、賢治さんは、浄土真宗を捨てて、日蓮宗に行ったんですか」と言われたんですね。ある程度、そういうことを言われるだろうなどは覚悟していたのですが。ただ、その時に話したのは、今言ったように、花巻という背景とかその時代というものがあって、花巻の中の浄土真宗のお寺というのが、言い方は悪いけど、今で言う、例えば商工会議所であったりとか、ロータリーのような、町場で何か商売をやっている人たちの一つのヒエラルキーのようなものも、持っていた部分があると思うんです。そういうことに対して、賢治さんは、そうじゃないってことを、ずっと考えていたと思うんですね。

だから、言い方は大変悪いかもされないが、日蓮宗だから賢治だとかっていうような方向にならないのであれば、それはすごく素晴らしいし、そういう機会を与えてもらえるのであれば、私はすごく嬉しいです。

司会 賢治の精神を正しく伝えていきたいということだと思います。ここにご参加の方々は、ほとんどが教区教化研究会の運営委員であるような方々だと思いますので、それぞれの地元で、次の教化研究会議、あるいは管区の研修会では宮澤賢治の話をしてもらおうとなっていただけだと。

先般の『宗報』に「現宗研だより」というのを書かせていただいておりますが、そこで、今回、中央教研で宮澤賢治を取り上げるについての内幕話を書かせていただいておりますが、ともかく、昨年十一月の段階で、「宮澤賢治を取り上げて」ということを所長が仰ったところから始まっております。決して、震災後の風に乗ったわけではありません。でも、震災という状況があつて、今こそ、賢治を取り上げるべき折になったのかなという思いは、私自身も感じているところでございます。

その他に、御質問はいかがでございますか。

質問7 この手帳のことで、お尋ねしたいのですが、当時、書き込みをする場合に、裏表紙のほうから書いていったのでしょうか。普通われわれは、林風舎の紹介がある方からめくっていくのですが、当時は裏から書くのが常識だったのでしょうか。

宮澤 常識だったのかどうか、はっきりは分かりません。

質問7 賢治の手帳が忠実な複製であるとすれば、そうと解釈してよろしいということになりますね。

宮澤 はい。

質問7 それから、もう一つ。『雨ニモマケズ』の詩の次に、いわゆる、お曼荼羅が出てまいりまして、この『雨ニモマケズ』の次のお曼荼羅だけが、釈迦多宝が出てくるんですよ。あとは、みんな消えているんですね。以前から疑問に思っていたのですが、これはなぜかということをご存じでいらっしゃれば、一つ、アドバイスをいただきたいのですが。

宮澤 その『雨ニモマケズ』の手帳に関しては、『雨ニモマケズ』の本文を、皆さん、どういう字で書いていたか見たい、どういう形で手帳に書かれているのか見たい、ということがあって、そういう形で作りましょうということになりました。

これも一つですが、『雨ニモマケズ』の本文だけをやると、全部で九ページになるので。ところが、見開いた状態で、その隣に曼荼羅が来ているわけで、そういうところをはずすというのはおかしいだろうということもあって、そこは入れるって形になったというのが本当です。

質問7 この間に、当然、落丁は無いと思うのですけども、「サウイフモノニ ワタシハナリタイ」と書いてある次のお曼荼羅だけに、釈迦多宝があるんですよ。あとはない。開いていっても。これは、何か意味があるのでしょうかね。

宮澤 それは、本人がそういうふうに書いているということですか。じゃなくて、元々手帳にあるはずなのに、出てないっていうことですか。

質問7 本人がそのように書いてあるのです。何かご存じであれば、ご教授いただきたいと思ひまして、今、お尋ねしているわけです。

宮澤 そこに関しては、正直、私は、はっきり分かりません。

質問7 以前から、疑問に思っております。なぜ、この詩の次だけに現れて、手帳の中のお曼荼羅には入っていないのか。

司会 むしろ、私どものほうで研究して教えてさしあげないといけないことなのも分かりません。日蓮仏教の、本当に専門的な部分でしたので、ちょっとお答えがしにくかったかと存じますけど。何か宮澤家で言い伝えがあるんじゃないかということをご期待されたのだと思いますが。

質問7 ありがとうございます。

司会 他にご質問はいかがでございますよう。

質問8 私は、この人たちは少し違うのですけれども、日蓮宗の僧侶であることは一緒ですし、それから、今、ニチレン出版という出版会社を経営しております。

それで、おじいさんになるのですね。清六さんと何回かお会いしまして、日蓮宗の竹内泰存師をご存知ですか。

宮澤 はい、もちろん。

質問8 彼と二人でお伺いをしまして、そしてお話をさせていただいたのですが、「賢治さんが亡くなるときに、千冊作ってほしいと言われたその本を、復刻をさせていただけないでしょうか」というお願いをしたわけです。

ところが、その清六さんのお話では、「その本も大事だけれども、宮澤賢治については、妙法蓮華經のお経本が、もう失くなってしまつて、それで、プレミアアがついて、高い物になっている。もし、本を出してくださいならば、その妙法蓮華經のほうを先にやってもらえないだろうか」、そういうふうにお問い合わせをされまして、明治書院ですか。出版社と私、話をしまして、そして了解を得て、今、妙法蓮華經が表に出ている物は、私の出版社から発行したもののですね。

そのときに、おじいさんに当たるのですか、清六さんと話をしたことは、「その千部のほうの記念すべき本は、それは、いずれ私にさせていただけないでしょうか」っていうお願いをしたんです。そうしたら、「ちょっと、あの本には問題がある」っていうことを言われたのですが、「しかし、私が死んだら、あなたにぜひ発刊してもらいたい」と、そういうふうに言われたんです。

それで、今もう、その時期が来ているというふうに思うんですけれども、今、何か、すごく、いいチャンスだと思われましたので、できましたら、今でなくても結構でございますので、私どもに、また任せていただければ、ぜひ、その本も発刊させていただきたい。そういうふうに思っておりますので、どうぞよろしくお願い致します。

司会 後ほど、バックヤードのほうで、林風舎さんとニチレン出版さんでお話を進めていただければと思います。

予定していた時間になりましたので、これもちまして、宮澤和樹さんの記念講演、「宮澤賢治の銀河世界」

を締めさせていただきたいと存じます。宮澤先生、本当にお疲れさまでございました。ありがとうございました。

宮澤 つたないというか、本当にひどい話し方で申し訳ありませんでした。本当にありがとうございます。